

養父市立八鹿小学校			令和6年度学校評価			(学校自己評価・学校関係者評価)		
1 本年度の学校教育目標			ふるさとを愛し 自らを高め 未来への道を切り拓く 八鹿青溪っ子の育成			4 総合的な学校関係者評価		
2 本年度の学校重点目標						・子どもたちが主体となって取り組んでいる様子がよく見られる。高学年のリーダーシップが、学校の活性化に少しずつつながってきている。 ・地域の教育素材・人材を活用した取組をさらに増やしている。地域とつながりを深める教育活動の創造が今後も期待される。 ・国語科を中心に表現・活用力の育成をめざした研修を行い、児童の主体性を引き出す課題設定の工夫や系統性を意識した指導内容等、研修を通して多くのことを学んだ。 ・不登校傾向の児童や集団で学びにくい児童への対応が年々増加している。定期的にケース会議を行いながら、児童が学びやすい環境作りや人員配置を行ったが、一部の教職員に負担がかかっていることも見受けられる。 ・宿題やそうあんくんの日の取組等、保護者と連携をとりながら進める内容については、学校から積極的に発信し理解を求めていく必要がある。		
3 学校自己評価結果 (A 優れている B 良い C おおむね良好 D 要改善)						5 評価項目ごとの学校関係者評価		
分野			評価項目・取組内容		達成状況	学校自己評価の適切さ		
(1)学校運営			“よろこび”が生まれる学校づくり ～子どもたちのわくわくを大切に、 誰一人取り残さない教育の創造～ ■一人一人が大切にされ、安全・安心な学校 ■明るい子どもの声が響く活力のある学校 ■保護者や地域とともに歩み、開かれ信頼される 「地域とともにある学校」		A ○児童は全体的に落ち着いて生活している。今年度のスローガンである「よろこびが生まれる学校づくり」を全教職員が意識し、明るく活気のある八鹿小学校となるよう全員で取り組めている。 ○地域の方に行事や授業、朝の時間など、多くの機会に関わっていただくことができた。 ○児童が中心となって企画・運営した児童会活動や学校行事は学校生活を活性化し、児童の達成感や所属意識を高めることができた。 ○児童ひとりひとりに向き合うことの大切さと難しさを感じながら、教職員で共通理解を図りながら体制づくりをし効果を上げている。 ●「学習面で取り残されている」と感じている保護者が少数ではあるがいる。 ●保護者の声・地域の声を集めつつ八鹿小学校ならではの教育活動を継続・発展できるよう、創意工夫を続ける必要がある。	（1）学校運営 ○従来の教育活動を復活させるのではなく、今の児童に合わせた改善を行いながら教育活動を進めている。児童が主役となっていきたいと生活している様子がわかる。 ○多様な児童に対していろんな関係機関と連携して取り組まれていることがよく分かる。たくさんの負担をかけているところもあると思うが、引き続き粘り強く取り組んでほしい。 ●学力や生活力など個々に差があり二極化している。それぞれの家庭の事情を加味しつつ、個に応じた学習支援を引き続きお願いしたい。 ※よってA評価は妥当である。		
(2)生きる力を育む教育の推進			【「確かな学力」の育成】 ○「語り」と「対話」による深い学びの創造 ○学習タイムの系統的取組 ○自主学習の取組の推進 ○読書活動の充実 ○ICTの効果的活用 【「豊かな心」の育成】 ○「東井先生の言葉12ヶ月」の活用 ○安心して学び、高め合える学級経営の推進 ○粘り強く諦めない心の育成 ○他者との関わりを意識させる取組 ○道徳の推進 ○やぶ・ふるさとキャリア教育の推進 【「健やかな体」の育成】 ○運動が好きな子の育成 ○体幹を鍛える取組 ○心と体の健康の発信 ○食育の推進と継続		A ○研究会を中心に教材研究や授業力が上がっている。研究会後も持続可能な形で指導方法に生かしたり、他教科に発展させたりしながら、自己研鑽してきたい。 ○タブレットを活用した授業が増えてきている。画像や動画等の活用やコミュニケーションツールとして活用する機会も増え、児童も操作方法に慣れ学習道具として浸透してきた。 ○全校朝会の校長講話で「東井先生の言葉12ヶ月」に触れ、児童会が生活目標を決め、各クラスで具現化するというサイクルが定着している。児童会が中心となって生活目標につながる活動を企画・運営したり、月末の振り返りを児童会新聞に載せ全校生に配布したりするなど、主体的に取り組ませることができた。 ○パスを使った見学や体験活動等、地域の教育素材を生かした活動ができた。ふるさとに学ぶ取組が広がっている。 ○全校統一の運動カードを作ったのはとても良かった。これからどんどん上手に活用していければ良いと思う。体育委員会が企画した大縄大会や隣接学年同士のドッジボール対決など、児童が主体的に企画し参加している活動が増え学級経営の点でも体力作りの点でも大変有効だった。 ○隣接学年との合同学習や幼・小・中と連携した取組、地域の方に協力を得ながら進めた校外学習やクラブ活動等、いろんな交流を通して、豊かな心を育てる活動がたくさんできた。 ○スクールカウンセラーが児童の発達段階に合わせて「こころの学習」を行った。こころの在り方を学ぶことで自分の良さや友達とのより良いコミュニケーションの取り方について学んだ。 ●視力の低下・肥満の増加・不十分な朝食、未処置の虫歯など、学校からの発信や危機感が十分伝わっていない家庭がある。 ●保護者の意見から、家庭学習や読書への取組は、個別に対応する必要があるが、まだ不十分な点が多い。定期的な振り返りが次の取組につながらないところがある。	（2）生きる力を育む教育の推進 ○児童が外で元気よく遊んでいるのは大変よい。児童会の働きかけや学級遊びがあって遊びやすい雰囲気になっている。 ○タブレットを使って発表している様子を見た。大事な力をつけていると思う。引き続きタブレットを活用させてほしい。 ○東井先生の言葉を生かした生活指導は引き続きお願いしたい。 ○外国語ではフォニックスが活用されていて良い。若いうちに音になれさせるのに効果的だと聞く。継続してほしい。 ○学習タイムで基礎基本の定着を図ったり読み聞かせを継続されたり地道な活動を引き続きお願いしたい。 ●オープンスクールではちょっと声が聞こえにくいところもあったので、しっかり声を出させてやってほしい。 ●休み時間にタブレットでタイピングを練習したり学習の続きをしたりする児童もあるが、それも大切な時間なのでタブレットを使った後、しっかりと目を休めて欲しい。保健指導もされているので児童には気を付けてほしい。 ※よってA評価は妥当である。		
(3)子どもの学びを支える取組			【生活指導の充実】 ○いじめ・問題行動の早期発見・早期解決に向けた取組 ○不登校解消に向けた取組 ○規範意識の醸成 ○児童理解と共通理解 【組織的・機動的な支援体制】 ○組織的な指導体制の確立 ○多面的な児童理解と支援体制 ○特別支援教育の充実 【危機管理体制の確立】 ○「新しい生活スタイル」の更新と実践 ○安全な生活環境 ○防災教育		B ○児童の心模様や児童から発信されるサインなど、多くの職員からの情報を共有し、児童の思いに寄り添うような指導を心がけた。 ○教職員間の情報交換ツールを活用し、気になる児童の様子や全体に周知する連絡等を共有し、日常的に全職員共通理解を図ることができた。 ○学期に1回の生活アンケートにより、児童の実態把握とアンケートを踏まえた面談、指導を随時行うことができた。 ○毎月の児童理解委員会や子どもを語る会、適宜行うケース会議や関係機関との会議等で、支援を要する児童の対応について共通理解を図る場が確保され、指導に生かすことができた。本年度は毎週ケース会議を行う機会もあり、課題解決に向けて、一層きめ細やかな指導ができた。 ○スクールカウンセラーや子育て応援課、こども家庭センター等と連携し、困り感のある児童、保護者の対応について検討し、指導に生かすことができた。 ○日々児童観察に努め、声をかけたり指導をしたりしながら、いじめの積極的認知や早期発見・早期解決を心がけた。また、いじめ対応チームで組織的に指導にあたることで、しっかりと児童と向き合い問題解決につなげることができた。 ○不登校傾向の児童の保護者とは特に連絡を密にとり、登校しやすい環境作りに努めた。粘り強い支援と多面的な児童理解により児童の登校意欲を高めることができていた。 ●保護者と連絡が十分にとれず、指導が行き届かない場合があった。 ●校舎の老朽化により故障や危険箇所が増加している。	（3）子どもの学びを支える取組 ○情報共有ツールや児童理解委員会、アンケートなどさまざまな方法で子どもの様子をつかんでいる。また、個別に対応が必要な児童も多いようで、今の教職員で努力されていることはよく分かるが、その分、先生の業務がかなり増えているのではないかと懸念する。 ○スクールカウンセラーを継続して利用している児童や保護者もあるようでよく利用されているのが良い。 ●児童の心の内を理解しようとする教師の力は、これからますます必要になる。若い教師が増えている中で、そういった技能をベテラン教師からしっかりと学んでほしい。 ●個別に対応する児童に地域の力を借りることができないだろうか。 ●子どもへ十分な食事が提供できない、また食事の大切さを子どもに教えられていない家庭もあるように聞く。こういったところに地域が関わってけると良いのだが難しい問題である。 ※よってB評価は妥当である。		
(4)家庭・地域・校種間連携			【発信】学校の発信力の強化 【家庭】「そうあんくんの日」「ねるねるウィーク」の取組 【地域】コミュニティ・スクールの連携 【校種】小中一貫教育・園小連携の推進		A ○赤米の栽培をはじめとする体験学習の講師、学習支援としてミシンボランティアやクラブ活動の講師、読み聞かせボランティアなど、地域の自然や文化、人材を活かした教育活動を広げるとともに、充実させることができた。 ○5歳児と5年生による新1年生体験入学、中学校登校等を実施し、小学校、中学校に向かう心構えを養うことができた。 ○学校だよりや、ホームページ、学級通信、電話、連絡メール、家庭訪問、面談を通して、地域と学校、保護者と学校をつなぐよう心がけた。学校や担任の意図を伝えることを大切にした。 ○本年度は教職員が中学校の授業を参観する機会を作った。中学校の学習の様子を知ることで9年間の継続した学びの在り方を振り返る機会になった。また、こども園にも参観に行き、今後入学してくる園児の様子やこども園の指導の様子を知ることができた。 ●家庭とともに取り組むことができる「そうあんくんの日」「ねるねるウィーク」は、その日だけしているような子も多く、この取組を負担に思っている保護者もいる。自立や自律を育むことに繋がるよう、引き続き主旨の説明と保護者の理解を図る必要がある。	（4）家庭・地域・校種間連携 ○6年生の中学校登校・5才児の体験入学など、交流をもつことで進学へのギャップを減らし、期待値をあげる取組が継続されている。しっかりと連携をとりながらこれからも進めて欲しい。 ○地域コーディネーターには、クラブ活動や学習の講師の確保、地域素材についての情報提供、企画・立案など大変お世話になった。そのおかげで、充実したふるさと学習を進めることができた。引き続き、ブラッシュアップしていけるといい。 ●コミュニティ・スクールだよりを配布し、学校ボランティアを増やしていくことで地域の教育力を取り入れることができると思う。 ※よってA評価は妥当である		
(5)教職員の資質向上			【教職員の資質向上】 ○教職員が互いに個性や能力を発揮できる職場環境づくり ○OJTによる若手教職員の資質向上 ○風通しの良い職場環境 【ワーク・ライフ・バランス】 ○勤務時間の適正化を図る取組 ○業務改善の推進 ○年休取得の推進		B ○児童理解や授業づくりなど教職員の不安や悩みが相談しやすいよう、学年ブロックの集団を生かして声を挙げやすい体制づくりをしている。メンターを配置し、若手教師の育成をおこなっている。 ○体育が得意は教師が実技研修を行ったり、ベテラン教師へ相談を持ちかけアドバイスをもらうなど、職員間のコミュニケーションが活発にできる職員集団になっている。 ○学期始まり・学期終わりは業務が増える時期になるため、午前中で児童を帰し成績処理や学級事務を行う時間を確保したことで、その時期の残業は減った。 ○低・中・高学年ブロックでの相談が盛んで、職員間で連携をとって業務を進めることができていた。 ●業務改善は少しずつ進んでいるが、勤務時間が長く、退勤時刻が遅い教職員がいる。熱心さから時間過多になることもあるが、業務の精選と勤務スタイルの改善が課題である。 ●生活指導やケース会議等組織で対応を考える場合、放課後に打ち合わせや会議を持たざるを得ない。通常の手元の業務にプラスαになるため、退勤が遅くなるケースはでてくる。	（5）教職員の資質向上 ○人権課題や特別支援教育の研修など、どんどん学んで児童へ還元してもらいたい。新しい教育がどんどん入ってきているため、若手もベテランも大変だろうが学び続けてほしい。 ○若手教師が元気に児童と活動していると聞くと安心する。引き続き、若手が萎縮したり仕事が大きなストレスになることがないよう、これからも良い職員集団を作っていってほしい。 ●全体的に退勤時刻が早くなっていることは良いことである。教職員の健康や活力が何より大切。児童の前ではいつも元気な職員集団であってほしい。帰宅が遅くなっている職員の業務が軽減できるよう更に改善してほしい。 ※よってB評価が妥当である。		